地球から核兵器をなくそう

三月二十一日、被爆地広島で開かれた「八二年・平和のためのヒロシマ行動」には、全国から集った約二十万人が参加し、平和への提言、平和行進など、核兵器増強への怒りを込め、平和を求める催しが六会場でくり広げられました。この行動には、三池労組からも十人の仲間が参加しました。

ヒロシマの心を世界へ

十九分会（三川）田中繁満

三月二十一日、二十万人の大集会に参加するため、南から、北から、飛行機で、船で、列車で、バスで広島に――。

私も炭掘る仲間の六人（福岡班）とともに、午前七時十分発で広島に向けて出発。広島駅着午前十一時、続々と反核のゼッケンを着けた人、旗を持った人で駅はいっぱいになる。街は会場に向かう人々の列が長々と続く。みんなの顔は、ヒロシマ行動の意義を理解し、平和に対する気持を表わし、通常のデモに対する参加とは、ちがった異質な感じを受けた。

会場に向かう隊列の中には新潟の人も、沖縄の人もいる。四国の人も、外国の人も、空色の地に白で、原爆ドームと月桂樹で平和を表わした旗を持って――。

思想や立場をこえ「反核」に結集した人びとは、広島で核兵器廃絶に向けての運動の第一歩をしるしたのだ。

午後一時、六つの会場で花火が打ち上げられ開幕。前夜からの雨もあがり、青空がのぞく。

広島と長崎で、原爆によって三十万人以上の人が命を失っています。冥福を祈って黙とうを捧げると、各会場は鎮魂と静寂にしばし包まれた。

「平和のための行動」に反対する右翼団体は、「善良な市民は行動に参加しないように」と連呼したが、それも平和のための行動の開幕によって四散してしまった。

私たちも原爆慰霊碑に詣で、六つの会場をまわる。

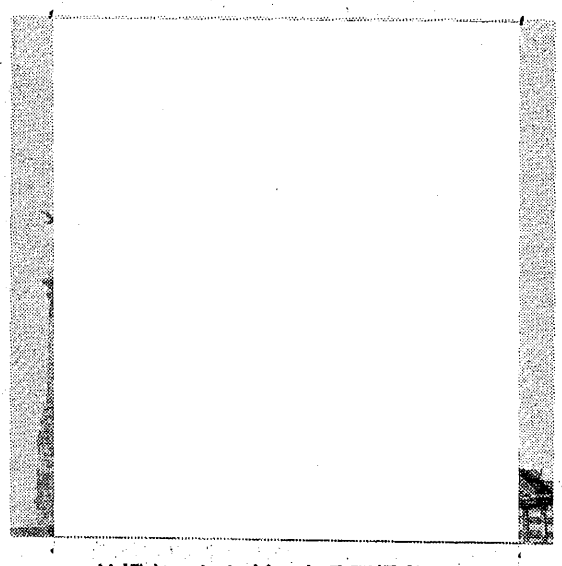
アメリカの若い男女も、手を合わせて慰霊碑に詣でていた。これさせてはいけないことをいやというほど知らされた。が人種をこえた人の心である。

戦争は世界で一番の罪悪である。この集会に参加して一層その反核は反米になると、自重するように通達した保守政党。感を強くした。

平和集会に参加するために、フランスから参加し、「反核は人類の願いである」と叫んだ農民。

私も、長崎に落ちた原爆をこの眼で見ている。私はこの集会に参加して良かったと思った。平和の尊さと、核兵器の恐ろしさを風化

この集会が、平和への一里塚であるように祈らずにいられない。



被爆者の怒りがこもる原爆ドーム
（撮影＝黒田勝儀さん）

三月二十一日早朝、小雨降る原爆の町広島に各地から平和を愛する仲間が結集した。その数二十万人といわれ、広島の町は反核一色にぬりつぶされた感じだった。

広島駅から平和公園へと続くメーンストーリーには、三十七年前米軍の投じた一個の原子爆弾で廃墟と化し、百年は草木も生えぬといわれたおもかげはない。広々とした道路、緑の街路樹、どこに戦争の傷跡があるのかと、目を疑うことしばし。

ノーモア ヒロシマ

梅内敬一

いま、反核二十万人集会の会場から、老被爆婦人九十五歳広本フサ様の遺志をうけつぐ、被爆二世の会の一員として叫びます。

会場いっぱいにノーモア・ヒロシマ、ナガサキの声がとびかっています。しかしあれから数年のち、第五福竜丸の久保山愛吉様の命をうばい、あやまちはくりかえしませんという誓いをふみにじり、人類は、私たちは、ノーモア・ヒロシマ、ナガサキを言う資格を失ってしまいました。ただザンゲすることしかないと思っています。これが広本様のヒロシマの心です。

（原文のまま）

広本フサ様の遺志を継ぐ被爆二世の会
広島市南区西蟹屋四丁目二の一四

×

この一文は、ヒロシマ集会に自費で個人参加した、二十六分会（港務）の飯塚英雄さんに、会場の一隅でビラの裏に走り書きで託されたものです。文中にある広本フサさんは、国会議事堂前でハンストをされて亡くなった方です。梅内さんも広島でハンストに加わられた方です。

（編集部）

広島反核行動で思う

労仂部員　栗野親生

いろいろと思いを浮べながら、平和公園内の資料館へまず飛び込む。そこにはこれが戦争だ、これが核なのだと教えてくれる、生々しいできごとを見ることができた。一枚一枚の写真には、見るにも耐えないすさまじい記録が残され、独占資本家どもの野望のいけにえにされた人たちの姿がそこにあった。

また三十七年すぎた今日、原爆病で苦しむ人、いつ発病するかと不安な日々を送る、被爆二世三世にたいして、政府は今だにつぐないをしていない。そればかりか、昨今の情勢をみると、ふたたび世界制覇を夢みる独占資本とその手先どもは、安保条約をテコに日米軍事同盟の強化と軍拡へ一歩一歩進んできている。

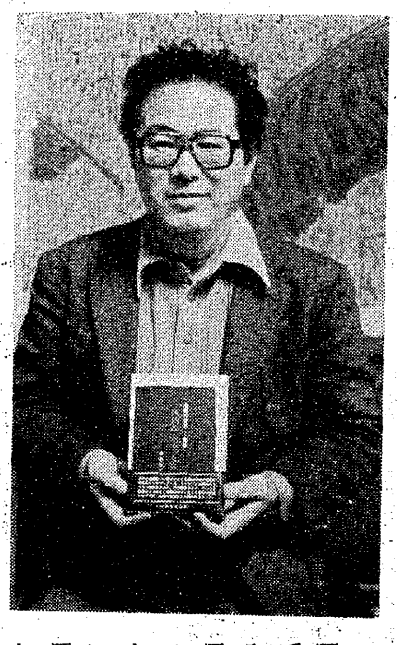
その反面、私たちの態勢はどうなのか、あまりにも戦争や核にたいして無関心層が多すぎるのではないのか。今のままでは平和を守ることはできない。広島集会で歌手のさだまさしが、「平和とはガラス玉だ、しっかり守っていなければすぐにこわれてしまう」と発言した。芸能人にしてはいい発言だったと思った。

守るということはなにかを、私なりに考えてみた。それは間違ったことは間違だと、はっきり発言し行動して行くことではないのか。広島集会に参加する中で「青年よふたたび銃を取るな」「母親よ息子を戦場に送るな」の言葉を、今一度思い起こしながら帰路についた。

埋もれた資料を駆使

「坑内馬と馬夫と女坑夫」

武松さん、執念みのる



二十四分会（本所）の武松輝男さんが、このほど「坑内馬と馬夫と女坑夫」（東京・創思社刊＝二百四十七頁、千八百円）を出版されました。

武松さんはいま、本紙に「囚徒おぼえ書き」を連載中ですが、いずれも地底の記録として、また三池炭鉱前史に連なるもので、かねてから資料を蒐集し、聞き書きをつづけていたもので、ようやくその執念がみのりました。

三池炭鉱では、明治十一年から昭和六年まで、坑内馬が使用されていますが、その過酷な労働のゆえに体重が減り、二年数カ月で廃馬になるという悲惨な実態を、膨大な資料と丹念な聞き書きのなかから、はじめてその実像に迫っています。また坑内馬にまつわる、馬夫や女坑夫についても、具体的なエピソードをまじえて語られており、当時の坑内労働が彷彿としてきます。

この本は「埋葬地」「坑内馬」「馬夫と女坑夫」「人柱、馬柱」から構成され、武松さん自身の手になるカットや絵が入っています。

「三池炭鉱の発展に寄与しながら犠牲になった者は多くいる。囚人坑夫もそうだし、与論島労務者もそうである。また一般募集坑夫もいる。戦時中の徴用労務者、強制連行中国人、朝鮮人、戦時捕虜もいる」その受難の歴史のなかで、坑内馬への鎮魂を願い、〝坑内馬に目の目を〟という執念がなければ、本にして出版することはできなかったでしょう。武松さんは「ぜひ供養塔を建てたい」と語っています。本は、一般書店に依頼もできますが、組合事務所でも取り扱っています。

いまこそ反核・平和を

国際婦人デー福岡集会

主婦会事務局長　平川弘子

三月七日午後一時から、福岡県婦人会館で第二十七回国際婦人デー福岡県集会が集かれ、約四百人（三池主婦会から六人参加）の婦人が結集し、くらしを守り反核・平和の運動を強めることを誓い合いました。

議長団選出（島会長も）、実行委員長あいさつ、来賓の連帯のあいさつのあと、つぎのような基調提案（要旨）を確認しました。

『一九〇八年、世界的恐慌の中で、ニューヨークの婦人労働者が〝パンをよこせ・参政権をよこせ〟と叫んでデモを行なったのをきっかけに、一九〇九年にはベルリンの二十万人デモをはじめ、ロシヤのほか各地で婦人の闘いがもりあがりました。

日本では、一九二三年三月八日はじめての国際婦人デーが、山川菊枝ほか社会主義を支持する婦人たちによって開かれましたが、開会数分後に警官によって解散させられ、それ以後戦争とファシズムへの道を、急速にたどっていきました。

今年は、国際婦人デーが開かれて七十二年目で、かってない世界的反核・反戦の闘いが高まるなかで迎えました。

いま婦人をとりまく情勢をしっかりとらえ、闘いを総括し、課題に取り組むことが求められています。

国際婦人デーの歴史は、戦争反対の闘いの歴史であり、婦人の地位向上を求め、世界の婦人と手をつなぐ闘いの歴史でした。

私たちは、いま世界的規模で広がる戦争の危機に対し、今こそさらに世界の婦人との連帯を強め、二度と戦争を許さない闘いに立ち上がりましょう。

職場での団結、地域での婦人の連帯で三・二一のヒロシマ集会を成功させ、国連軍縮総会に向けて反核・反戦の闘いをさらに広げていきましょう』

また、集会では「広島の心を世界に」と題して、広島県教組前委員長の宅和純氏が記念講演を行ない、物静かな口調のなかにも、確信を持って語られる言葉は、一人ひとりの心に深く刻み込まれたのでした。

『広島の心とは、原爆慰霊碑に刻まれた不戦のことば〝安らかに眠ってください。過ちは二度と繰り返しませんから〟を考え続け、その真髄をくみとることが大切であり、空念仏に終らせてはならない。

戦争とは、むなしく、惨虐なもの、また理性と英知をふみにじるものである。死んだ人はもの言えぬ人となったが、生き残った者は沈黙すべきだろうか。沈黙とは、暗黙のうちに時の流れを肯定するものである。

もう黙っている時ではない。今こそ反核・反戦の運動を広げていきたい』と結ばれました。

さらに集会では、一兆円減税を求める決議のほか、三つの特別決議とアピールを採択しました。集会のあと、参加者全員が市内三カ所で、平和アピールのビラを配り、街頭での訴えなどの行動を行ない、解散しました。